

名は体を表す

# アカメガシワ

「名は体を表す」といいますが、植物の和名や学名は、その種の形態的特徴をもとに命名されることが多々あります。本種もそのひとつで、「新芽が赤く、カシワのような葉をもつ」ことにちなんでつけられています。この新芽はちよつと面白い仕掛けがあります。赤い新芽の表面を爪でこすってみてください。すると、表面の赤い毛が取れて、本来の緑色の葉っぱが現れます。これは、まだ幼い新芽は、太陽光線から身を守る必要があるため、赤い毛で覆われていると考えられています。また、葉柄に蜜腺があるのも特徴で、花の中ではなく外にあるので花外蜜腺といえます。



アカメガシワの雄花

科名 トウダイグサ科

生薬名 アカメガシワ

利用する部位 樹皮

薬効 整腸

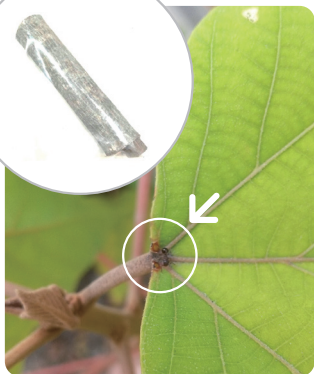
成分名 ベルゲニン (タンニン)



アカメガシワの雌花



アカメガシワの果実



アカメガシワの花外蜜腺



アスファルトに生えるアカメガシワ。新芽は赤い

アカメガシワは、パイオニア植物の一種として知られています。19世紀アメリカの西部開拓時代の開拓者を「パイオニア」といい、そこから転じて、初めて何かに挑戦するとき「パイオニア精神」などといったりします。植物学では、火山の噴火などといったん植生がゼロになった土地に、最初に現れる植物種のことを指します。種子散布が頻繁で、発芽能力が高いなどの特徴をもっているものと推測されます。実際に、アカメガシワはこの能力を都会でも発揮しており、さまざまな場所で雑草化しているのを見かけます（樹木なので草ではないのですが……）。

薬学では、アカメガシワの樹皮を生薬アカメガシワとして、健胃、主に整腸に用います。また、葉や樹皮を用いてアカメガシワ茶としても飲用されます。このお茶の含有成分はケルセチンなどのポリフェノールやタンニンです。いわゆる渋味成分を多く含有し、収斂作用があります。

生薬アカメガシワ





ダニと共存する大木は、カンフル剤の語源

# クスノキ

各地の神社仏閣や街路樹、大学構内などでよく見かける大木の代表格が、クスノキです。歴史のある神社仏閣などでは、樹齢100年にもなる大木を見ることができず。

この葉には精油のカンフルが含まれており、葉をちぎると爽やかな芳香がします。枝葉は、血行促進や消炎作用があるとして、湿布剤などに用いられてきました。以前は強心薬としての利用もあったそうで、その名残からか、ダメになりかけたものを立ち直らせるようなときに、「カンフル剤」という言葉が使われます。

英名をシナモンファミリーというクスノキ科には、シ

ナモンなど香りをもつ種が多いという特徴があります。そしてもうひとつ、葉に見られる3つの脈、いわゆる

「三行脈」も、クスノキ科の植物に多く見られる特徴で、ニッケイやテンダイウヤクでも見られます。

一方、他のクスノキ科植物には見られないクスノキの特徴として、ダニ室の存在があげられます。前述した3つの脈の交差点に、プクツと盛り



沖縄で見つけたスナズルの花。  
丸い葉はハマヒルガオ

上がった箇所があります。これがダニ室。中にはダニが住んでいます。これは、植物がつくった構造で、中にダニを住まわせることで、食害から守ってもらうているのだそうです。

最後に、非常に変わったクスノキ科植物を紹介します。スナズルといい、木本のイメージが強いクスノキ科とは似ても似つかない姿かたちをしています。沖繩などの海浜環境で、ヒルガオ科ハマヒルガオなどとよく一緒に見かけます。葉はほとんど退化しており、代わりに吸盤のようなもので他の植物に寄生する、寄生植物です。台湾などでは薬用植物としての利用も知られているそうです。



◀クスノキの葉

▲春日大社(奈良)のクスノキ



科名  
クスノキ科

生薬名  
ショウノウ

利用する部位  
枝葉

薬効  
血行促進、消炎

成分名  
カンフル

すぐに効果が現れる？

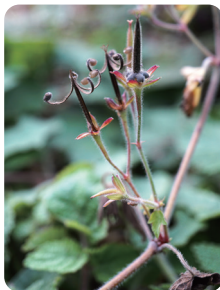
# ゲンノシヨウコ

- 科名 —  
フウロソウ科
- 生薬名 —  
ゲンノシヨウコ
- 利用する部位 —  
地上部
- 薬効 —  
整腸・止瀉
- 成分名 —  
ゲラニン (タンニン)

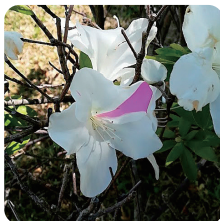
ドクダミやセンブリとともに、日本の三大民間薬として知られる薬草です。漢字で「現の証拠」と書くところ、煎じて飲むとすぐに効果が出るといわれています。ダイエットのサプリメントで売られていたら、みんな飛びつきそうな話ですが、知られているのは主に整腸や止瀉作用です。もともと、煎じ方によって使い方は異なり、長く煎じると止瀉薬に、短く煎じると緩下薬になります。

ウメ (162ページ) と同様に、ゲンノシヨウコには白花と赤花の2つの系統が知られています。白花は東日本に、赤花は西日本に多く、なかには赤花に白色が混じる個体もあるそうです。この現象をキメラ咲きといい、バラや

キキョウ、ヒラドツツジなどでも見られます。ヒラドツツジでは、突然変異の白花に、元来の花色である赤色が現れたとされていますが、はたして、ゲンノシヨウコもそうなのでしょうか。



ゲンノシヨウコの果実



キメラ咲きのツツジ

もうひとつ、ぜひ観察してもらいたいのが、独特な形をした果実です。成熟するにしたがって果皮が乾燥する乾果のひとつで、はじめは筒状なのですが、熟すと下部が裂開して種子を飛ばします。そして、このはじけた後の果実の形が神輿を担いでいるように見えることから、別名をミコシグサといいます。一方で、欧米では、裂開する前の細長く伸びた筒状の果実を例えて“crane's bill (鶴の嘴)”と呼びます。

なお、園芸で広く知られるゼラニウムは本種の近縁種です。以前はゲンノシヨウコと同じ *Geranium* に属していたため、そのまま、ゼラニウムという呼び名で流通していました。その後、分類が変更され、現在では *Pelargonium*



▲生薬ゲンノシヨウコ

▲ゲンノシヨウコの花

属ですが、日本ではゼラニウムと呼ばれる、ちょっとややこしい状況になっています。





# 花？ いえいえ葉っぱです ドクダミ

科名	ドクダミ科
生薬名	ジュウヤク
利用する部位	全草
薬効	利尿、抗菌
成分名	デカノイルアセトアルデヒド

抜いても抜いても出てくるしつこい雑草。葉をちぎると嫌なおい。あまりいいイメージがないのがこのドクダミでしょう。かくいう筆者も、ドクダミにしてやられた苦い経験があります。中国に住んでいたころ、地元の名産である米麺を食べていて、それと知らずにトッピングして食し（てしまっ）た経験があるのですが、口に入れた瞬間、あの香り、もといにおいが口の中いっぱい広がってビックリ！あとで知りましたが、中国人はドクダミの真っ白な根茎を刻んで、シヨウガやネギ、ニンニクなどと同じトッピングとするようです。

このように、葉に強烈な香り成分を含むドクダミです

が、この成分は乾燥させると消えてしまうので、葉を乾燥させてつくるドクダミ茶は、すっきりして飲みやすいお茶です。

薬学では、ドクダミ茶に使うのと同じドクダミの地上部を生薬ジュウヤクといい、主に民間薬で、利尿や抗菌を目的に使用されています。ほかにも便秘や尿量減少などさまざまな効果が知られていて、生薬名は、10の薬効があるとされていることにちなむようです。

植物学的には、ドクダミ科という分類群に属し、他の植物とは似ても似つかない、独特の姿かたちをしています。なかでも変わっているのが、花の形態です。一見、

花びらに見える白い部分は、じつは総苞葉と呼ばれる特殊な葉です。その上に、花びらや萼片びんぺんを欠いた、雌しべと雄しべのみからなる多数の花が穂状になっています。もっとも、花に虫が来ていることから察するに、これら総苞葉は花びらと同様の働きをしているように思えます。

なお、この変わった花をもつドクダミにも、いわゆる八重咲きが知られていて、どういうわけか、花序のあちこちから白い葉（苞葉）が現れます。



生薬ジュウヤク



ドクダミの花序

これは、雄しべと雌しべからなる花の下にある、ごくごく小さな葉（小苞）が、突然変異で大きくなったもののようなです。地味でくさい嫌われ者の雑草ですが、植物学的には観察ポイントが満載の、優れた学習素材です。



根は野菜に、種子はクスリに

# ゴボウ

きんぴらごぼうに、牛ごぼうのしぐれ煮。ゴボウは和食に欠かせない伝統野菜のひとつです。地中深く張った根を一気に引っこ抜くさまになぞらえた「ゴボウ抜き」という言葉があるなど、日本人の生活にも深くかかわってきました。

しかし、意外にも原産はユーラシア大陸で、欧米では、英名バードックルートの名でハーブティーとして広く飲まれています。水溶性食物繊維のイヌリンを豊富に含んでいるため、お通じがよくなるなどとして、日本でも飲まれる方が多いようです。ところで、ゴボウの花は見たことない方が多いのでは

ないでしょうか。農家さんでも花を見たことのある方は少ないそうです。それもそのはず。ゴボウ栽培では、春に種を蒔いて秋に根を収穫するので、植えてから2年目に咲くゴボウの花は珍しいそうです。キク科特有の複数の花が集まった頭花で、その見た目は、同じキク科のアザミそのものに似ています。農家さんでも花を見たことのある方は少ないそうです。それもそのはず。ゴボウ栽培では、春に種を蒔いて秋に根を収穫するので、植えてから2年目に咲くゴボウの花は珍しいそうです。キク科特有の複数の花が集まった頭花で、その見た目は、同じキク科のアザミそのものに似ています。



ゴボウの花序

です。オケラのところ(84ページ)でも紹介した花序の周りにある総苞には、ゴボウの場合は鋭いトゲがあります。

ゴボウの学名 *Arcium lappa* の種小名も、このトゲのあるさまを示しています。

薬学では、根ではなく果実を用います。生薬ゴボウシといい、発汗や利尿作用が知られています。

ところで、ゴボウはゴボウでも、ヤマゴボウ科に属する外来種で有毒植物のヨウシュヤマゴボウが雑草化しています。ブドウやブルーベリーのようない見おもしろいような果実をつけますが、食べられないのでご注意ください。一方で、岐阜県を中心に、菊ごぼうや山ごぼうという名の山菜が食されています。こち

らはゴボウの近縁種でキク科アザミ属のモリアザミの根で、ゴボウのように用いるようです。



◀生薬ゴボウシ

▲ゴボウ

- 科名 キク科
- 生薬名 ゴボウシ
- 利用する部位 果実
- 薬効 発汗、利尿
- 成分名 パルミチン酸

## 世界のお茶文化⑨ マテ茶

南米のお茶といえばこれ。肉食文化で、野菜の摂取量が少ない南米では、「飲むサラダ」として重宝されています。特に、アルゼンチンやウルグアイ、パラグアイでよく飲まれているようです。茶葉には、南米原産のモチノキ科モチノキ属の常緑高木イェルバ・マテの葉や小枝を使います。淹れ方が独特で、ひょうたんを切ったマテと呼ばれる茶器に茶葉を入れて、ポンビーリヤという金属製のストローで飲みます。洗って何度も再利用できるので、とても環境に優しい飲み方です。アルゼンチンの大都会ブエノスアイレスでは、老若男女がみな、片手にマテ、もう片手にお湯を入れた水筒を持って街なかを歩いています。このマテ茶は、社交的な意味もあり、ひとつの容器でまわりの人々と回し飲みをします。

ちなみに、中国では同属異種の葉を使って飲む、苦丁茶くくていというお茶があります。茶葉を棒状(葉巻型)、あるいははより状によっているのが特徴で、味は文字通り、たいへん苦いです。



マテとポンビーリヤ



苦丁茶



マテ茶を飲んでいるところ(アルゼンチン)

マテチャノキの花



## 世界のお茶文化⑩ レモンングラスティー

イネ科の多年草レモンングラスの葉を使ったハーブティーで、台湾から東南アジアでよく飲まれています。全草にシト랄などのレモン様の芳香成分を含んでおり、名前の由来になっています。太い葉の根元の部分が特に香りが強く、東南アジアではハーブティーやタイの伝統料理トムヤンクンなどに使われます。葉から抽出されるレモンングラス油は、精油としてアロマセラピーに用いられます。

インド原産といわれるレモンングラスですが、日本の気候でも栽培することができます。最近では国産レモンングラスの葉を使ったハーブティーも見かけるようになりました。個人的な経験では、乾燥させたレモンングラス葉を細かく切ってお茶パックに入れ、そこに湯を注いでよく蒸せば、市販品に負けないハーブティーが簡単につくれます。

トムヤムクン(タイ)



レモンングラス



レモンングラスの精油